

---

# 去りゆく旅人は二度口笛を吹く

神田美優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

去りゆく旅人は二度口笛を吹く

### 【Nコード】

N5309Z

### 【作者名】

神田美優

### 【あらすじ】

高校1年生の夏、友人と2人鈍行列車を乗り継ぎ大旅行に出かけます。

そこで起きる珍道中、人々との出会いと別れ、そして淡い恋心…？  
広島県と岩手県というかけ離れた2つの地で繰り広げられる人情あふれる旅行記を書き綴っていききたいと思います。

初投稿作品なので稚拙な文章が目立つと思いますが、温かい目で見

守ってくださいると幸いです。

## 序章。きつかけはいつも唐突に

「旅行に、行きませんか？」

高校1年も数ヶ月を過ぎ、そろそろお盆も終わりに差し掛かるあの日のことだった。中学の頃の同級生であり、仲が良かった古泉という男からそんなメールが届いた。詳しく聞いてみると広島と岩手に列車を乗継ぎ数日かけて行きたいそうだ。やれやれ、なんと無茶な話だろう。昔から旅行は好きであったがこんなに長距離を移動するのははじめてのことだ。しかし始まったばかりの高校生活に不慣れであった俺は特に予定もなく、昔なじみと出かけるのも悪く無いだろうと思いつつ返事で了承した。こうして夏の終わりに、俺たちは旅にでたのである。

お盆も終わり夏休みも終盤に差し掛かった8月某日、朝5時を過ぎた頃。俺はいつもの黒い中折れ帽子に夏物のジャケットを羽織り、茶色い鞆一つという身軽さで地元の駅の改札で古泉を待っていた。（親父臭い格好とは言わないでほしい。）旅行に行くのにそんなに荷物はいらぬ。着替えと洗面具、あとは身分証と金さえあればなんとかなるものだ。重く多すぎる荷物は列車を乗り継いでいく旅には向いていないし、俺自身もごちゃごちゃと持っていくのは嫌いだ。傍を通勤する人ごみが電車が到着するたびに俺の横を忙しなく通り過ぎる。皆、仕事のことしか頭に無いようだ。

「狭い日本、そんなに急いでどこに行く…か。」

そんなことを考えていたら通路の向こうから古泉が歩いてくるのが見えた。

「おはようございます。おまたせしまして申し訳ございません。。」

古泉がそんな堅苦しい挨拶をしてきた。

この古泉という男はかなり変わった男だ。なんせ、同い年である俺にさえ敬語を使う筋金入りの礼儀正しさを持ち合わせているからだ。16の高校生らしい幼さはなく、妙に大人びている。まあ、それを言うなら俺もかなり親父臭い性格だがな。中肉中背で顔も多少幼さを残す古泉は、Tシャツにジーンズ、キャップという普通の若者らしい格好をしていた。それでももってあんな性格である。見た目のギャップが激すぎるだろう。

「まもなく、2番線に電車が参ります。白線の内側にてお待ちください。」

不意にそんなアナウンスが駅の構内に響いた。俺らが乗る予定の電車だ。この時間帯は電車に乗ることが無いので混み具合がわからないので早めに乗って席に座りたかった。

「挨拶は後だ。古泉、急ぐぞ。」

俺はそう声を掛けホームへの階段を降りだす。

「かしこまりました。」

と、後ろから古泉の返事が聞こえた。まったく、つくづく礼儀正しい男だ。

## 第一章。香りのよいお茶を楽しみながら列車は熱海を目指す。

東京に向かう鈍行列車に乗り込み、明け方の故郷を後にした。数日間ではあるが、しばしの別れである。運良くふたり並んで座れたため、乗換駅まではのんびりと過ごせそうだった。

「こうやって会うのも久しぶりですね。」

唐突に古泉がそんなことを言うてくる。確かに、中学卒業以来メールのやり取りはあったが実際に合うことはなかった。

「だな。お前も相変わらずかわらないな。いんちき臭い敬語つかつて。」

古泉はフツと鼻で笑うと、嬉しそうに言った。

「敬語は僕のアイデンティティですよ。」

きつとこいつは、大人になって酒を飲み交わす仲間になっても敬語なんだろう。そう思うと俺も笑みがこぼれてきた。

そんなふうには愛もない雑談をしながら俺たちは東京へ向かった。

朝の7時を過ぎる頃、品川に到着した。売店に寄りお茶とおにぎりを2つほど購入し、東海道本線で熱海へ向かう列車の中で食べる朝食である。熱海につくまで1時間半以上あるのでゆっくりと食べられそうだ。

鮭とおかかのおにぎりを、東京の高層ビルが立ち並ぶ雑多な風景を眺めつつ味わう。ペットボトルの緑茶はお気に入りの銘柄。口の中に広がったおにぎりの味をさっぱりと締めしてくれるいいお茶だ。古泉は家で食べてきたらしく、俺がおにぎりを頬張っている間、うとうと船を漕いで眠そうにしていた。朝は弱い奴だったな、たしか。しばらく見ていたらすやすやと眠りにつきはじめた。旅はまだ長いんだ。起こさないように静かにすることにしよう。

朝食は終わったが、熱海につくまであと30分ほど時間があった。車窓からの風景は次第に自然が増えていき、都会の喧騒はもうなか

った。

「さて、本でも読むかな。」

このまま景色を眺めているのも良かったが、今は眠気を飛ばすのに頭を使いたかった。このまま2人で眠ってしまっただは大変だ。俺は鞆の中から文庫本を取り出して読み始めた。

## 第二章。潮風の匂いを感じ海の声を聴く

本を一段落読み終えて顔を上げると、車窓の向こういっぱい広がった海が目飛び込んできた。真夏の陽の光を浴びてキラキラと輝き波打つ海は、それはもう言い表せないほど綺麗だった。まるで、車内まで潮風の匂いが漂ってくるような、そんな気がした。熱海に近づくにつれ、街から湯けむりがチラホラと見えた。

「ひとつ風呂浴びていきたいなあ。」  
さぞかし気持の良いことだろう。夏の昼下がりに入る露天風呂もまたいいものだ。眼下には雄大に広がる大海原。心地よい潮風に吹かれながら、寄るさざ波の音を聞く。ゆっくりとお湯を楽しんで温まって、風呂上りに冷たい麦茶を一杯飲む。これがまた格別においしいのだ。

うつとりと目を閉じ思いを馳せているといつの間にか熱海駅に着いていた。

「あつ、いけねえ。ここで降りなきゃ！」  
慌てて古泉を叩き起こし、荷物をまとめて列車から飛び降りる。危うく乗り過ごすところだった。古泉も後ろから眠そうに目をこすりながらついてくる。ここでJR東日本からJR東海に乗り換えて沼津に向かう。熱海には駅のホームにだけの立ち寄りだった。

列車の外はかんかん照りのお日様があたりを照らし、時折心地良い風が吹いていた。しかしそれにしても暑い。暑いなんてもんじゃなくくらい暑い。一気に汗が吹き出してきた。時間も8時20分を過ぎた頃で、そろそろ日差しも強くなり始める時間だ。

「なあ古泉、次の列車まであとどれくらいある。どっかで温泉入っていかないか？」

時間があるならちよつと寄り道して行きたいところだ。汗を流して気持ちよく旅を続けたい。



「そんな時間ありませんよ。ただでさえギリギリの日程なんですから。次の電車まで後2分しかありません、急ぎましょう。」  
俺のそんな儂い望みは打ち碎かれた。しょうがないか、鈍行で広島まで行くのだ。時間がいくらあっても足りないだろう。

「あーあ。どうせなら熱海の温泉で一泊していきたくらいだな。」  
そんなことをつぶやきつつ、俺は沼津行きの列車へと乗り込んだ。

### 第三章。縁あり情けあり向かい合うボックス席。

1時間以上かかった熱海までとは違い、沼津まではほんの十数分で到着した。しかしここからが長い。古泉に聞けば浜松まで東海道本線に乗り2時間少しかかるらしかつた。

「今が9時前だから浜松に着くのは11時頃か。古泉、お昼ごろにはどの辺りまで行ってるかね？」

長い間列車に乗ってるようだとお昼時に食事を取れないこともある。そういう時は前もって駅弁を買わなきゃいけない。

「そうですね、12時頃にちょうど豊橋に着く予定です。次の列車まで15分ほど時間がありそうですよ。」

プリントアウトした予定表を見ながら古泉が言った。

「それなら駅弁買うなり立ち食いそば食うなりの時間はあるな。うんよし、行こう。」

愛知の豊橋か。どんな駅弁あるんだろう。まだ数時間先のお昼を考えつつ意気揚々列車へと足を運んだ。

浜松行きの列車に乗り、2人並んでボックス席に座った。前の席は上着と大きな旅行鞆が置いてあり、荷物の主は不在だった。

「こんなとこに荷物置きっぱなしか。危ねえな。」

噂をすればなんとやら。そんなことを呟くと荷物の主が帰ってきた。

50代後半から60位の幸の薄そうな初老の男だった。席に座るなり深くため息をついている。そんな辛気臭い様を見せられちゃこつちもため息が出そうだ。その男は自分の鞆をガサゴソと漁るとまたため息をついた。

「お茶を買い忘れてしまったか。」

そんなことを言っている。まったくしょうがねえ奴だ。

「おじさんよあ。ほら、もう一本持つてるからあげるよ。」

俺は鞆から熱海で買った缶のお茶をだして渡した。

「いやいや、そんなそんな、お構いなく。」

恐縮そうにペコペコしている。頭の下げ方は板についたように決まっていた。

「なに、気にするなよ。困ったときはお互い様だよ。」

男は、ありがとうございませとまた頭を下げ俺のお茶を受け取った。

俺があげたお茶を飲むと男はほっと肩を撫で下ろし言った。

「おいしいお茶をどうもありがとうございませ。私、桂幸太郎かつしゅうたろうと言います。」

先に名乗られたら名乗るしかない。

「いえいえ。お気に召されたならよかったです。俺は御崎千春みさきちんとい

う、田舎の学生です。」

つられてさっきまで黙っていた古泉も挨拶する。

「僕は東京の学校に通ってる古泉と言う者です。」

古泉はペコリと頭を下げるとまた黙ってしまった。そういえばこいつは少し人見知りの気があったな。

「桂さんはご旅行ですか？」

そう聞くと桂は少し苦笑をして言った。

「ええ、まあ。米原まで地藏盆を見に行くんです。私のことは気軽に  
おじさん、とでもお呼びください、御崎さん。」

ああ、何か訳ありなのだろうか。深く聞かないほうがいいだろう。

「それじゃ途中まで一緒にですね。俺達は広島まで鈍行乗り継いで行く途中なんですよ。それと、俺のことは気軽に千春とか春とか呼んでください。皆そう呼んでいるので。」

桂はニッコリと笑みを浮かべると、

「そうでしたか、では、春さんと呼ばせてもらいますね。しかし、広島まで鈍行とは大変ですね。こんなオヤジじゃ嫌かもしれませんが、よろしければ米原までの旅路を一緒にしませんか？」

とうれしそうに言った。

「ここで会ったも何かの縁かもしれませんな。こちらからもよろしく願います。楽しい旅行にしましょうや。」

列車は夏の静岡を走るのであった。

#### 第四章。暗い過去と勘違い。それはそうと浜松のうなぎはおいしい。

ちようどいい具合に冷房の効いた車内に三人の笑い声がこだまする。お茶を飲みお菓子をつまみ、楽しい道中のひとときだ。

桂氏とは読書、映画好きという私の趣味と一致し、楽しく会話が弾む。しかし会話の途切れ目に時折見せる寂しそうな目と僅かなため息がただの一人旅では無いことを物語っている様だった。本人はその行為に気付いてないらしい。俺も気付かないふりをしておくことにした。

ふと、桂氏の鞆から携帯の着信音が聞こえた。しかし本人は会話に夢中で気づかない。

「おじさん。携帯なってるんじゃない？」

俺の一言にはつとした桂氏は、一言断ってデッキに出かけていった。

「あのおっさん、何かありそうだな。」

俺がボソッと呟くと、古泉も頷いた。

「そうですね。何か人には言えない事情がありそうですね。」

あのため息と目は何かとても辛いことがあったのだろう。思い返してみると俺達との会話も少し無理をして笑っていたような気がする。不謹慎だが、まるでこの後自殺でもしそうな…そんな雰囲気さえも感じた。

「どうしたのでしょうかね。こんなことを言ってはダメですが、不況ですし、会社をクビになった、なんてこともあるかもしれないですね。」

古泉のその言葉を聞いて、ふと不安が頭をよぎった。リストラになり、家族に告げられず出張を装い一人旅。そして見知らぬ土地でそのまま自殺。そんなことをしようとしてるんじゃないだろうか。

「…おっさん。そんなことしちゃいけないよ！」

そう言っただち上がると古泉は驚いた顔で俺をみていた。

「どっつしました？」

まわりに聞こえないように古泉に耳打ちをする。

「もしかしたらリストラされて自殺しようとしてるかもしれない。独りにしちゃまずいぞ、探しに行こう。」

古泉の返事も聞かずに俺は慌てて桂氏が出ていった方向に走りだした。

(おっさん、死ぬなよ…)

そんな俺のテンパった行動を止めようと古泉も後を追うのだった。

「おっさん、早まるな。そんな事しても誰も喜ばないぞ!」

デッキで電話を終えた様子の桂氏を見た俺はそんなことを叫びつつ駆け寄り、肩をがっしりと掴んだ。

「生きてりゃいいこともあるから、な!」

息を切らせてそう呟く。古泉も後ろからやってきた。

「はい?」

俺のいきなりの行動に桂氏は目を丸くし、驚きの言葉を漏らしていたのだった。

「なるほど。私がリストラされて自殺をすると思っただのですか。」

席に戻り事情を説明すると、桂氏は納得して笑い出した。

「いやはや、とんだ勘違いをしてしまった。申し訳ない。」

俺も古泉もペコペコと頭を下げて謝る。

「いいんですよ。それよりも、私のことを気にかけてくださってありがとうございます。そうでしたか、ため息が漏れていましたか。」

桂氏はそう言うと、何があつたかを語りだした。

「数ヶ月ほど前の事です。実は、妻に先立たれました。亡くなった当初はやれ法事だやれ葬式だとても忙しく、悲しむ暇も無いほどでした。しかし長年連れ添った妻です。こう何ヶ月か経つと辛さが身にしみてくるようになりました。いつも妻が居る筈の空間がポツカリと空いていて、冷たい椅子にはもう誰も座らない。父と母の仏壇にはもうひとつ新しい遺影が飾ってある。とても辛く悲しい事です。家に居ることが苦痛なのです。だから生前妻が好きで、二人で

行った地蔵盆に出かけようと思ったんです。でもダメですね。やはり妻を思いだしてしまう。」

桂氏の悲しそうな顔を見て、何も言えなかった。古泉も押し黙っている。しかし、一変して桂氏の表情は笑顔になった。無理をしていない、屈託の無い笑顔。

「ですが、春さん達のお陰で気分が晴れました。あなた方と居ると本当に楽しいです。私のことも気にかけてくれて、本当に嬉しく思いました。いつまでも悲しんでいては妻も安心して天国で暮らせませんよね。私も変わらなくては。春さん、古泉さん。あなた達と出会えて本当によかった。ありがとうございます。」

そう言つて桂氏は頭を下げる。俺も古泉も驚いて顔を見合わせていた。どうやら俺の早とちりは結果的にはいい方向に働いたらしい。俺のことを気遣つて言つてる訳では無いであろう、そのにこやかな笑顔を見て、俺はホツと胸をなでおろした。

「それならよかった。安心したらなんかお腹すいてきちゃったな。」

俺の腹の虫がタイミングよく鳴り出した。古泉と桂氏は同時にクスクスと笑い出した。

「そうですね、僕も少し。桂さんはどうですか？」

古泉がそう尋ねると、桂氏の腹の虫も鳴り出した。

「私もみたいですな。」

さつきまでの暗さが嘘のように、俺たちは腹の底から笑いあった。

「次は、浜松。浜松です。」

車内アナウンスが鳴り響く。浜松か、うなぎがうまいところだったな。

「古泉、おじさん。うなぎ食いにいこうよ、浜松のうなぎ。」

古泉はため息をついて予定表を確認する。

「うなぎは魅力的ですが、そんな時間ないですよ。」

二、三本電車を遅らせたところで今日中には広島に辿りつけるはず

だ。それならうなぎを食べていきたい。

「そんなに急ぐことも無いだろ。おじさんも大丈夫？」  
ニッコリと頷く桂氏。それをみた古泉も諦めたのか、やれやれとい  
った表情でため息をついていた。

「よし、浜松のうなぎを食いに出發！」

俺たちはうなぎ屋を目指し列車を後にした。



## 第五章。遠ざかる背中を見つめまた会える日に想いを馳せる。

炎天下の浜松駅前をふらふらと歩くと、どこからともなくうなぎの良い匂いが漂ってきた。俺たちはその匂いを頼りにうなぎ屋を探すことにした。歩みをすすめるにつれ、うなぎ屋のあの独特で香ばしい匂いが漂ってくる。

駅から徒歩5分ほどで匂いのもとを発見した。昔ながらの古風な店構えのうなぎ屋だ。のれんをくぐると店内はがらんとしている。丑の日も過ぎたからだろうか。

「いらつしゃい。」  
店の奥の厨房から白髪頭の小太りの店主が顔を出した。俺たちが窓際の席に座ると3人分のお茶を持ってきた。

テーブルの横に立ってかけてある品書きを眺める。うな重、うな井、蒲焼。どれも皆食欲をそそる。

「僕はうな井にしましょう。」

古泉が品書きを横から見つつ言う。

「私はうな重にしましょうかね。」

桂氏も決めたようだ。俺もうな重にしよう。店主を呼び注文した。しばらくすると厨房からまたうなぎの良い匂いが漂う。空腹である俺たちにとってこの待ち時間はある意味幸せな拷問だ。

「あい。うな重、うな井お待ちどう。」

どんとテーブルにお待ちかねのうな重が置かれた。酒、みりん、濃口醤油、砂糖とを各々のうなぎ屋が絶妙のさじ加減で作るタレは言葉では表せないほどの旨みがあり、そのタレを塗り輝く蒲焼は口の中でとろけるような最高の焼き加減で白米の上に乗っている。白米も良い炊き具合であり、蒲焼の影にちらりと見える米粒は白銀に輝きそそり立っていた。添えられている肝吸いも良い香りを放ち美しく透き通っている。まさに芸術作品だ。

「では、頂きます。」

俺が言うと二人も手を合わせ「頂きます」といい食べ始めた。

一口くちに入れるととろけるようなうなぎの旨みが舌いっぱい広がる。至福のひとつときだ。さすが精をつけると言われているだけのことにはある。先ほどまでものすごく疲れていたにも関わらずどんどんと箸が進む。気がつけば重箱の中はほぼ空に近い状態だった。

「ああ、生きていてよかったな。」

俺のつぶやきに二人はプツと笑い出した。

「春さんは面白い人ですね。」

桂氏がお茶を飲み気を落ち着けつつ言う。

「ええ、そうですね。格好といい言動といい、じじ臭いですよね。まあ、そこが良いところなんですがね。」

古泉は褒めているのかバカにしているのかよくわからない事を言っている。まあ、良い。肝吸いも味わうことにしよう。

「ああ、俺はきつとこれを味わうために生まれてきたんだなあ。」

俺が感動の溜息をつくると二人はまた吹き出すのであった。

食事を終え、12時43分発の東海道本線豊橋行きに乗る。その後また三人で楽しく談笑しつつ豊橋、大垣と乗り継ぎ、15時40分過ぎには米原に到着した。ここで桂氏とはお別れである。

「私はここで。楽しいひとときをどうもありがとうございました。あなた方のことは忘れません。」

桂氏は俺たちが次に乗る東海道・山陰本線新快速の列車の乗口まできてそう言った。ほんの数時間ではあったが、俺たち三人にとつては本当に楽しいかけがえのない時間であった。別れは辛いものだ。

「僕も桂さんと出会えて楽しかったです。地藏盆楽しんできてくださいな。」

古泉もお辞儀をして桂氏を見送る。もっと一緒に旅行したいが、そういうわけにも行かない。

「おじさん、お達者で。またいつかどこかで会ったら、一緒に旅をしような。」

そう言って笑うと、桂氏もニツコリと微笑んでくれた。

「では、またいつかお会いしましょう。」

桂氏はそう言い、後ろを向いて歩き出した。同時に発車ベルが鳴り、ドアが閉まる。

「一期一会、か。」

遠ざかる桂氏の背中を眺め眩く。

「そうですね。もう会うこともないでしょうが、できたらまた会いたいですね。」

列車は動き出し、米原駅を後にするのだった。

## 第六章。夕暮れになびく黒髪と澄んだ瞳の見つめる先に。

桂氏と別れ二時間半ほど列車に揺られると姫路に着く予定だ。しかしやはり急に一人いなくなるというのは寂しいものだ。古泉との会話も一時間ほど経つととぎれとぎれになってくる。沈黙が少し辛かったので古泉に聞いてみた。

「なあ、古泉。俺らは何でまた広島と岩手に旅行してるんだ？」  
先ほどまでぼんやりと黙っていた古泉は急に元気になり、がさごそと自分の荷物を漁り一冊の本を取り出して見せた。漫画本だ。表紙には鉄道員の格好をした女性キャラと「列車むすめ」というタイトルが書いてある。

「実は、この列車むすめという漫画の舞台が広島と岩手と銚子なんです。その舞台の地で夏の間スタンプラリーを行なっています、ぜひとも参加したいと思っただけです。銚子は日帰りで行けませんが、岩手、広島となるとそうも行かなくて。なのでこうやってあなたをお誘いしたと言うわけです。」

嬉々としてしゃべる古泉。どこが可愛いだのここがいいだの色々語りだした。こんなに饒舌な古泉ははじめて見るかもしれない。しかしその反面、俺はがっくりと疲れてしまった。

「そ、そうか。漫画のスタンプのために俺と旅行してるわけか。」  
聞かないやよかった。そう思ったがすでに遅かった。

18時過ぎに列車は姫路に到着した。ここで山陰本線に乗り換えだが、それまで50分ほど時間があつた。少し早いが駅弁を買ってどこかのベンチで夕飯にするとしよう。せっかくだから姫路城を眺めながらでも食べたいところだが、列車に間に合わないと困る。浜松で二本ほど遅らせたのでぎりぎりの日程になったのだ。

駅構内の少し大きめの弁当屋を見つけ立ち寄る。まだ時間が早いせいか客は女性一人だけであつた。

肩までかかる艶のある黒髪をチエツク柄の赤いカチューシャで止めた少女。透き通るような丸く大きい目は幼さを感じさせた。歳は十七、八程度だろうか。俺たちが弁当を選んで隣でのり弁当を凝視していたが、財布の中身を見て溜息をついている。ちらりと見えた財布の中には10円玉が2枚ほどしか入っていなかった。

不意に少女の腹が小さく鳴り、それに気づいた俺がチラリと目をやると少女は顔を赤らめて店の外に飛び出していったのであった。

「おばちゃん。のり弁ふたつ。あとお茶も二本ちょうだい。」

レジのおばちゃんに弁当をもらい古泉と店を出る。ふらふらと駅の中を歩いていると先ほどの少女がベンチに座って下を向いているのを見つけた。特徴的な赤いカチューシャのおかげですぐに分かった。「お嬢さん。良かったらこれ、食ってくれないかな？」

近づいてのり弁とお茶が入ったビニール袋を一つ差し出した。

「えっ？」

少女は顔を上げこちらを見る。先ほどの弁当屋で会った時のことを思い出したのか頬を赤く染めた。

「腹減ってるけどそんなに金持っていないんだろ。余計なお節介だったら捨てちまうていいからよ。良かったら食いな。」

驚いた顔をする少女。それもそうか、見知らぬ男に弁当差し出されりやびつくりするな。

「あ、あの。いいんですか？」

返事の代わりに少女の膝に弁当の袋を置いてやった。驚きつつも「ありがとうございます。」とお礼を言い袋から弁当を取り出し始めた。よつぽどお腹が空いているのだろう。

「困ったときはお互い様よ。なあ古泉。」

少女の隣に座り古泉を見るとなぜか古泉も驚いた表情をしていた。

「そののり弁、僕のために買ったのではなかったのですか。」

「どうやら俺が二つ買ったので一つ自分のものと勘違いしたらしい。」

「すみません。ちょっとお弁当買いに行つて来ます。」

そう言い残し古泉は慌てて来た道を引き返していった。

「いいんですか、お連れさん。私が食べてしまつて。」  
心配そうに聞いてくる。

「いいのよ。あいつが勘違いしただけだしな。気にしないで食いな。」  
「  
そう言つて俺も弁当の封を開け食べ始めた。」

古泉も戻つてきて三人で弁当を食べる。その後お茶を飲みながら  
談笑をした。

「私、八神優佳やがみゆかつていいいます。広島の親戚の家に行く予定だつたんですけど、うっかり電車賃だけで食費を忘れてしまつて。」  
「ずいふんとそそっかしい娘である。聞けば静岡から飲まず食わずでここまで来たらしい。大したものだ。」

「俺は御崎千春つてんだ。こいつは古泉。俺らも広島まで旅行に行く途中なのよ。」

俺も挨拶をする。古泉もペコリと頭を下げた。

「そうなんですか。それでは広島まで一緒にいたしませんか。お弁当のお礼もしたいですし。」

こんな可愛い子と旅ができるなら願つてもないことだ。俺も古泉も快く承諾した。

「お礼なんていいけどさ、可愛い子と旅行できるなら大歓迎だ。」  
「  
そう言つと八神は照れて頬を染めていた。どうやら感情がすぐ顔に出るらしい。」

「そろそろホームに向かいますよ。八神さんも同じ電車ですよね。」

古泉が時計を見ながら立ち上がった。列車まで後十分程度である。

「八神ちゃん。弁当のゴミ捨てとくから貸しな。」  
「  
そう言つてゴミを受け取り立ち上がった。」

「あ、ありがとです。あと、優佳つて呼んでください。」  
「  
恐縮そうに頭を下げている。」

「俺のことも気軽に千春とか春とか呼んでくれな。」

にっこり微笑むと古泉と優佳を引き連れ山陰本線のホームへと足を  
進めるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5309z/>

---

去りゆく旅人は二度口笛を吹く

2012年1月9日02時46分発行